
幽霊ハンター 夢紗風子

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽靈ハンター 夢紗風子

【Zコード】

N8721E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

幽靈ハンター夢紗風子が幽靈相手に大暴れ。

(前書き)

連載候補ですが、やるやしません。

私の名前は風子。幽霊退治のスペシャリスト。

みんなはそう呼ぶけど、そうでもないのよ。

最近の幽霊は強くなつてきてて、手に負えなくなつていてる。
ハア…、事務所置もうかしら…。

私がそんな気持ちでテーブルに手を付き、うな垂れている間にも
電話が掛かってくる。

「やあ、風子」

「仕事また請けてくれないかな?」

電話の向こう側で軽い口調で話す男。

間宮塵は私の幼馴染だ。

彼も同業者として、同じ街に同じような事務所を構えている。
でも…正直、今事務所を置もうとしている私より、幽霊ハンターと
しての腕は

三流ね。今日も手に負えなくなつた仕事を私に回してきたんだわ…。

「もう、塵…。」

「いつも、言つてるけど、自分の能力以上の仕事は軽々しく受け
ないの」

「全部後で私に回つてくるんだから…」

私はそのまま、彼は少し申し訳なさそうに頭を低くして謝るのだ
けれど

それは一時の事で…。

「ははは、でも君がいて助かるよ、本当」

「じゃ、仕事の内容話すから聞いてね!」

最後には彼の陽気な口調と、せっぱりした中に含む強引さに押し切られて仕事を引き受ける流れとなる訳で…。

「じゃ頼んだよ、愛してるぅ 「

ガチャツーツー……。

何が愛してるよ、口だけ達者な人ね。
でも、どこか憎めない。

ま、いいわ、大体話は分かつたし、現場に赴くが。

とある、寂れた旅館。

寂れているというよりは、営業はもうしていない。
建物だけが、ひつそり残っていた。

山の麓に佇むこのを、解体業者は仕事を引き受け
シャベルカー や、破碎機械を導入し、解体しようとしたらしいんだ
けど

それを邪魔する何者ががいて、思つように工事が進まないらしい。
具体的にどういう風に邪魔されるのか?

関係者に聞いたかんじでは、突然、「壊すなよ」と後ろから声がしたかと思うと

乗っている機械が動かなくなるとか。

その声の主の姿を見たものはいないらしー。

彼等はその見えない妨害者を靈の仕業と判断したらしく、塵に仕事を依頼してきたんだけど

生憎塵の前にその姿を現さないらしく、排除のしようがないらしーの。

彼、靈感がなくて、自分で見ることが出来ないらしくって。

大抵こういった理由で私に仕事が回ってくるわ。

靈感ないなら、幽靈事務所開くなつつい…。

さてと、やりますか。

まず、敵の所在をはつきりしないとね。

それに役立つのが、今手に持っている方位磁石。

一見ごく普通の市販の物と変わらないように見えるけど違うの。

靈的アイテム販売会社、蘊蓄堂から買い入れた立派な靈具よ。

私の体内に宿る靈力をこの磁石に込めるとき、靈の場所を指し示してくれるの。

針が物凄い勢いで、回ったかと思つと……、建物の三階付近を針の赤い部分の先が

指し示す。

どうやら、いるようね。強い反応だわ…。

私は慣れているとは言え、この強い靈波動を目にしてから体に強い緊張を抱いてしまつた。

今回のターゲットはかなり手強いわ…。

……。

薄暗い建物の中に足を踏み入れると、中は静まり返つていて

足の踏み場のないくらい、ダンボールが置かれたまま放置されていた。

その先に薄っすら見える階段……。

埃を被り、足元にはネズミが這いついていた。

普通の女性なら、悲鳴を上げて逃げるだらうが
もつ慣れっこね……。

全く心に動搖は走らない。

今私は走っているのは、強い靈を警戒する靈力と緊張のみ。
行くわよ。

私は階段を一足飛びに、一つ一つ上がっていくと
颯爽と三階までやってきた。

そして針をライトで照らし、靈の居場所を確認する。
細い廊下の向こう……。

私はライトの光を頼りに中へ中へと進んでいく。
ここだわ……。

私が立ち止まつた場所は細い通路に建ち並ぶ密室の一つ。
その部屋の扉の向こうを針が振るえを伴い、強く指示してゐるわ。
真ん中で穿たれて固定されてゐるに、そこから離れて針単体でドア
に突き刺さらんばかりに
振動していた……。

深い息をすーっと吐くと、靈力を研ぎ澄ませる。
扉のノブを回してみると、簡単に開いたわ。

踏み込むわよ……！

ドカ！

「はーーー！」

「いるのは、わかつてますよ~」

「出てきなさい～、幽靈ちゃん

私は靈と接触する際、性格が変わってしまう。
とても快活になるの。

快活つて言つのは変かもしない。

恐怖に飲み込まれないために、ぶちきれるかんじかな。
部屋は静まり返っていた。

「出ておいで～」

「やもないと、この部屋、この手榴弾で破壊するわよ…」

脅しでは無かつた。現にバッグの中に手榴弾は入つてて
それに手に握つて右手をピンにかけているから。

『ガガガガガ…』

地から響くよくな振動が部屋全体を揺らし始める。

すると…、部屋の真ん中附近の畳から何かが浮かび上がってきた。
私は髪を逆立たせ、構えを取ると左足を軸に強く踏ん張る。
来たわ…。

「てめえ、人の縄張りに何様のつもりだ」

「殺すぞ」

節くれだつた杖を持ち、浴衣をきた謎の老人の幽靈…。
姿格好からして、この旅館の客の幽靈か。

「あんた!~!~!~で何してるので?..」

「もう取り壊すんだから、悪戯してないで、出て行きなさい」

幽靈は私の言葉を聞くと、左右にその姿を揺らめかせ

いきなり怒鳴りつけてきた。

「何だと、てめえ、上から田線で言つてくれるじゃねーか」

「死んじゃいな！」

そう言つたかと思つと、幽靈は握りこぶしを作り部屋の壁を思いつ
きり叩いた。

壁がその衝撃で一瞬にして崩れ落ち、大きな石の瓦礫が積みあがる。
その一つを握ると、大きく振りかぶり投げつけてきた。

「くらえやーーー！」

大きな石の塊が私の顔目掛けて飛んでくる……！

私は右に空いている空間に地を蹴り、咄嗟に飛びのいた。
体ごと畳みの上に崩れ落ちそうになるが、柔道の受身のよひこ一回
転をして

それを拒むと、その場にしゃがんだ状態で着地した。

私は立ち上がり幽靈に向き直ると、カバンに入ってるものを手で探
り始める……。

液体の入ったボトルを取り出すと、その蓋を開け幽靈に向けて投げ
つけた……！

その液体が幽靈の体にかかると、幽靈がまた体を左右に揺れ動かし
うめき声を上げて苦しみ始める。

「うるあー、なんだこれは」

「苦しい、なにかけやがった～～」

「うちで飼っている猫の小便よ

そつあのボトルには、とても臭い猫のおしつこが入っていたのだ。
猫のおしつこは靈的な物が嫌う物質が混じっているという。（注、
作者オリジナル）

ここしかないわ…。奴を倒すのは……！

私は右手の手刀を頭上高くに振り上げると、目を閉じ全ての靈力を
手刀に
集中させた。

「切り裂けーー！」

私は幽靈に声をあげながら突進し、その手刀を幽靈に思いつきり振り下ろした。

「悪靈撲滅！！」

「ウギヤアアア」

幽靈の体に白い亀裂が走ると、断末魔をあげてもだえ苦しむ。

「どどめーー！」

またカバンに手を突っ込むと、粉が入った袋を取り出し
袋の先を破り、幽靈の頭からかぶせる。

「う、これはああ、塩ーーー！」

そつただのお塩。幽靈が弱いのは有名ね。
とどめはこれが一番よ。

幽靈はナメクジのように段々体を縮小させながら

小さくなつやがて、一言呟いた。

「お前枕元に氣をつけるよ……」

「ふ、黙つて消えなさい」

その小さくなつた幽靈の体に、袋の端に残つた塩を満遍なく浴びせる。

ブシュ……。

戦いは終わつた。幽靈は息絶えた。

いえ、元々死んでるから、その表現はまざいわね。
成仏したとでも言つておくかな。

さて、仕事は終りよ。家に帰つてシャワーでも浴びるか……。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8721e/>

幽霊ハンター 夢紗風子

2010年10月10日03時35分発行